
洞窟探検家

根津賀 内

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

洞窟探検家

【Nコード】

N5435X

【作者名】

根津賀 内

【あらすじ】

ひよんな事から偶然手にいれた謎の地図。
その地図が示す古の社には、広大な洞窟へと導く階段が隠されていた。

少年が迷いこんだ洞窟の恐るべき秘密とは？

ロマンホラー、真紅の緋伝説！！

冒険のきっかけ

夕方の陽が落ちようとする時間、店じまいを始めた古本屋で少年が迷惑がられながらも帰らずにねばっている。

なんととはなしに手に取った古典文学の本に古い紙切れが挟まっている。

よく見ると地図の様だが、ずいぶん昔に書かれたものらしい。

少年は江戸時代より前だろうと、勝手に想像しながら、その地図を眺めていた。

「あれ、この地形、うちの家の近くの裏山に似てる」

店主に帰る様促され、仕方なく地図ごと古典の本を買い店を出た。

お社

学校が休みの土曜日、少年は例の地図を片手に山に入っていた。鬱蒼と生い茂る草を掻き分け、地図にある印を探す。

「なんだろ、あれ・・・」

かなり年代物の小さな古いお社が眼前に現れた。

錆び付いた鉄の扉には不気味な呪文の様な文字が描かれ、お札が沢山張り付けられている。

「開けてみようかな・・・」

鉄の扉の蝶番に触れると何とも言えない悪寒に襲われたが、勇気を出して思いきり開いた。

「わっ！！！！」

お社の中は真っ暗闇で、かすかに見えるのは地下へと続く石で出来た階段のみであった。

「何も見えないし今日は帰ろう・・・」

少年は気味の悪い雰囲気を感じながら、山を降りた。

洞窟探検

「翔!どこへいくの?」

外出しようとした少年を母親が呼び止めた。

「ああ、ちよつと探検に行ってくる」

少年が少し面倒な感じで答えると

「何そのライトの付いたヘルメット、リュックにもいっぱい詰め込んで……」

「裏山に行くだけだよ、夕方には帰るし」

母親は怪訝な顔をしながら、

「気をつけるのよ、あんまり危ないとこいっちゃだめよ」

と言いながら、翔を見送るのであった。

ようやく、昨日のお社まで来ると

「今日はしっかり準備してきたぜ」

と独り言を言いながら、例の鉄の扉を開け、ヘルメットのライトをオンにした。

お社の中には蜘蛛の巣で張り巡らされた仏像や幽霊の様な不気味な絵が飾られていた。

翔は計画通り、石の階段を降り始めた。

その瞬間、

ボタン!!!!!!!!!!!!!!

大きな音と共に、地上に通じる階段が錆びた鉄の板で閉じられてしまった。

脱出不可能

「そんな、嘘だろ?!」

半泣きになりながら、閉じてしまった入り口の鉄板をガンガン叩く。押しても引いてもびくともしない。

「なんてこった・・・」

絶望感が全身を支配する。自分はもうここで死んでしまうんだと悲観的な考えだけが浮かんでしまう。

そして一時間ほど泣きわめいた後、翔は洞窟状になっている道を進む決意をした。

洞窟は自然にできた空洞の様でいくつにも道が枝分かれしており、翔はやけくそで左右の道を選びながら、進んで行った。

もう、三時間は歩いただろうか、もはや引き返せない状況に入口から動いた事ほとんどでもない過ちであったのではないかと後悔し始めた時、ふとももに鋭い痛みが走った。

「いってえ!!!!!!!!!!!!!!」

初めての戦い

ふとももにライトを当てるとコウモリが張り付いて血を吸っていた！

「いってえな！このボケ！！！！」

慌てて手で振り払い、リュックから包丁を取り出す。

りんごを剥くために入れておいた物だが、持ってきて正解だった。

血の臭いを嗅ぎ付け、さらに数十匹が襲ってくる。

「うわあああああ！！！！！！！！」

包丁を振り回し、必死に応戦する。

何匹かは払い落とせたが、どうしても全てを防ぎきれず、体を噛まれ、血を吸われてしまう。

コウモリの群れが退散した後には包丁に当たって死んだ数匹の死体と全身を噛まれ血だらけになった翔の姿があった。

最初の悲劇

噛まれた事による失血のダメージは想像以上だった。

頭はぼんやりとし、深い思考はできなくなり、ただふらふらと洞窟の中をさまよっている。

もう、何時間歩いたかも分からない。あるいは、何日も歩いたかもしれない。リュックの飲料と食料も底が尽きた。

「もう、だめかも・・・」

そう呟くと、遂に力尽きて、うつ伏せに倒れてしまった。

泥の水溜まりに顔を浸けてしまい、しこたま咳き込むと、口のなかに違和感を感じて、指でつまんでみる。

それは米粒ほどの小さな光る蒼い石だった。

「きれいだなあ、俺もう死んじゃうかもだけど・・・」

暫く眺めていたが、何を思ったかその石を飲み込んでしまった。

そして、しばらくして、翔は泥に顔を埋めて死んだ・・・・・・・・

光明

「がはあっ！！ゲホ！！ゴホ！！」

水溜まりに顔をつっこんでいた翔は突然、目が醒めた。

「あれ、俺死んだんじゃ？」

確かに生きている。

しかし、身体に変化があった。

まず、暗闇のはずなのによく辺りが見える。

空腹と喉の乾きがなくなった。

そして、驚くべき事にコウモリに噛まれた傷跡も綺麗に消えている。
服はズタズタに破れているのに！

不要になったライトを捨て、ヘルメットとずいぶん軽くなったリュックを装備し、再び洞窟を進んでいく。

片手は包丁を手放さない。

外で会ったら、通行人が卒倒しそうな格好だ。

「帰れるのかな、俺・・・」

不安と諦めが心のなかで入り交じっていた。

フランス人形

洞窟を探索している間、不思議とコウモリの襲撃はなくなっていた。いなくなった訳ではなく、天井でじっと様子をうかがう感じだ。

洞窟の行き止まりに初めて遭遇した。

「ここはダメだな・・・」

引き返そうとした時に、岩陰から、何かが移動するのが視界に入っ
た。

「!!!!!! 誰かいるの?!」

ゆっくり近づいてみると、そこにはこちらを見ている120センチ位のドレスを着たフランス人形がいた。

「!!!!!!」

思わずゾツとし、恐る恐る話しかける。

「お前、生きてるの、か？」

人形はこちらをじっと見つめていたが、

「お前の名は？」

作り物の声だった。

一瞬気を失いかけた翔は

「我が名はク・！・・・へ？し、翔だよ！」

頭を振って、言い直した。

無表情に翔を観察していた人形がまた機械の様な声を出した。

「転生は成功した様だな・・・」

「へ？どういう意味？」

「・・・」

「君の名前は？」

「ニャ・・・」

「ニャ？」

「それでいい、お互い敵の多い身だ。ここで組むのも一つの手か」

例え人形であろうと気が狂いそうな孤独から解放されたのが翔には
たまらなく嬉しかった。

「うん、うん、よくわかんないけど、一緒に行こう！！」

翔はフランス人形と行動を共にする事になった。

仲間

フランス人形は本当に人形だった。
正確には歩く人形と言ってもいい。

人形だけあって職人が完璧さを求めた美しい顔立ちだが、当然無表情だ。

話しかけても回線が切れているのか、基本無視される。

常に翔の三メートル後ろでとことこついてくる。

こいつと仲間になった事に何か意味があったのだろうか、向かって腹が立つのをこらえ、洞窟の探索を続ける。

三日分くらい歩いただろうか、最近は何も食べなくても寝れば何故か体力が回復していた。

そして三日間ぶりに人形が喋った。

「敵だ」

戦闘

「はい？敵ってなんだ？コウモリか？」

怪訝な顔をして、翔がニヤに尋ねる。

「そんな甘っちょろいもんじゃない。」

ニヤが感情のない声で答える。

その甘っちょろいのに、一回殺されてるんですけど・・・

と、ぶつぶつ文句を言う翔。

そして、こちらに駆けてくる数人の足音が！

「くっそ！きたか！」

慌てて包丁を構える翔、人形は5メートル後ろで待機している。

走ってきたのは赤黒い鱗に覆われた一つ眼の怪物三体だった。人間と同じ大きさを槍を装備している。

「おい！お前も手伝えよ！こんなの俺だけじゃ無理じゃん！……！」

人形は後ろで完全に機能停止している。

「ふざけんなよ！おい！お前！！助けろって……！！！」

三体は槍を構え同時に突っ込んできた！

振り回した包丁はかすりもせず、三本の槍が翔の胸と腹部を貫いた。

「がはあっ！！！！」

人形がゆっくり口を開き、凄まじい火力の火焰を吐き出した！！！！

瞬く間に翔もろとも三体の怪物は焼き尽くされた。

激昂

「目がさめたか。」

人形の声が聞こえる。

俺は死んだはず・・・こいつに焼かれて！！！！

突然起き上がると包丁でニヤに切りつける！

しかし、少女は難なくそれをかわす。

「お前ふざけんな！！！！生きてまま焼かれるのがどんだけ苦しいかわかってんのか！！！！！！！！」

「ああしなければ共倒れだった。お前は貧弱だが、不死身だ。私は畏怖すべき力を持っているがかよわい。」

「自分でかよわいとかいうな！この人形野郎が！」

「どうやら我らの敵も組んだ様だ、今仲間割れをすれば、向こうの思う壺だ。」

「だから敵って何なんだよ！お前こそ俺の敵じゃねーのかよ！」

翔の怒りが収まらない。

いつの間にかニヤの顔が翔の目の前まできて、そしてキスしてきた！

「ん！！！な、なにをする！！！！」

慌ててニヤを引き離す。

人形とはいえ美しい少女にキスされ顔を真っ赤にする。

「親愛の証だ、人間はこうするのだろうか？」

「ち、ちげーよ！馬鹿！お前！！」

「私の覚醒はまだ遠い、また暫く眠りに着くぞ」

「お、おい！待てよ！」

それ以来また人形は話さなくなった。

パンツ

翔は焼き尽くされた敵が残した鉄の槍を持っていく事にした。

包丁よりは幾分かは攻撃力も上がっただろう。

他に焼け残ったものはないか物色し、金属の胸あてを見つけて装備する。

「ニヤ！見てくれ！かっこいいだろ！」

後ろを向いたまま歩いていると、そのまま50メートル位ある崖に落っこちていった。

また、翔は死んだ。

一眠りして完全に回復すると、まる一日かけて崖を這い上がった。

崖の上では、ニヤがしゃがんでこちらを見ている。

「あっ！ニヤのパンツ見えた！」

おどける翔に人形は無反応だった。

コンビニ

ニヤと行動を共にすること一週間、無口もだんだん気にならなくなってきた。

むしろ完璧とさえ言える美貌に見とれてしまい、谷底に落ちて死ぬ事もしばしば・・・

何より孤独から解放された嬉しさの方が強い。

ある日、洞窟は大きな広間に出た。

のほろいだが、翔の口がポカンと開いた。

「なんでコンビニがあんなどこにあんねん・・・」

それは紛れもなく、日本にある「ファミ○」だった。

店内に入ってみると、ひとつ目の赤黒い鱗に覆われたばかりのものが、

「いらっしゃいませ!」

と愛想よく挨拶する。

言えねえ、お前らの仲間三人焼き殺したなんて、口が裂けても言えねえ・・・

ニヤが店員に「からあげ一つ」と言うと、

「お前食うんかい!!」

と、思わず突っ込んでしまう。

「240円です。」

「円かよ! すごいな円は! 異世界でも使えるのか!!」

やけくそで突っ込む翔を無視して、ニヤがカエルのがま口サイフからお金を取りだし清算する。

「おい、店員! 電話は繋がるのか?」

「はあ、そこに」

店員が指差す先に公衆電話があった。

ニヤに10円もらい、早速家にかけてみる。

・・・やっぱり繋がらなかった。

天敵

洞窟をさ迷って一ヶ月は経っただろうか。

翔、ニヤともに何も食べなくても生きられるのが不思議だったが、いや、そもそも二人は生きていると言えるのだろうか。

ひとつ目のコンビニ店員の仲間の襲撃が何度かあったが、翔の自己犠牲とニヤの超火焰攻撃でなんとか凌げた。

運よく鋼の鎧シリーズを着込んでいる奴がいたので、翔の装備もかなりよくなり、そう簡単には死なくなってきた。

「なあ、ニヤ、俺たちの敵って何なんだ？ いいかげん、教えてくれよ」

ニヤはその日は回線が繋がっていた。

「お互いがこの宇宙が始まった時からの天敵だ。どちらかが完全に消滅するまで闘いは終わらない」

「つまり、お互い死ぬほど大嫌いってわけだな。」

「そういう事だ」

「俺はニヤの事嫌いじゃないぜ」

顔を赤くしながら、翔がつぶやく。

「わたしもだ、翔」

感情がこもっていないので、真意はわからない。

突然、頭のなかで声が聞こえた。

低く、地獄の底の様に暗い声だった。

「お前がク．．．の生まれ変わりか．．．」

忌むべき物

「ぐっ！頭がいてえ！話かけるんじゃない！」

「おぞましきもの、葬る、永遠に」

「うるせーってんだよ！！！」

「必ず、消滅させる、我が天敵よ・・・」

不気味な声が去っていった。

「何なんだ、今のは！！！」

「きたな、今、やつが」

ニヤが応える。人形なのに汗？が少し浮かんで見える。

「声だけで気が狂いそうだった。今の奴だけは絶対殺さなければいけない気になった。」

翔は全身に水を被った様に汗をかいている。

「それが天敵というものだ。戦いに理由などない。相手の存在が消えるまで終わらない。」

「とにかく奴をさっさと倒して終らせよう」

「そうだな・・・」

それきりニヤの回線が切れた。

漆黒の剣士

洞窟の旅は続く、まるで、洞窟自体が一つの世界である様に延々と果てがない。

ある日、ひとつ目の集団が何者かと戦闘しているのに遭遇した。

怪物は20体くらいいたが、瞬く間に細切れになっていた。

「そこで隠れてる奴、出てこい」

怪物を倒した者が声を出した。

長髪で漆黒の鎧を着た、美しい剣士だった。

「へへ、ばれたか」

翔とニヤが岩影から姿を現す。

「子供？ここにきて人間に会ったのは始めてだ」

「お前の名は」

ニヤが男に問う。

「アネスだ。」

ニヤが少しの間沈黙して、相手を凝視する。

「やはりな、翔、この男は味方だ。」

「おお！そっか！あんためっちゃ強いじゃん！！よろしく！」

「勝手に話を進めるな、まあ断る理由もないが……」

剣士が苦笑いしながら話す。

「断れるはずがない、お前は翔の……」

その言葉を剣士が遮る。

「何の話だ？貴様、ニヤと言ったな、まさかニヤ……」

その時、30体位のひとつ目の集団がまた襲ってきた。

剣士はかすり傷ひとつ受けずに敵を倒していく。

翔は幾分かは喰らうが致命傷を受けず倒せる様になってきた。

今回はニヤの出番なく倒せそうだ。

全て倒した後、翔が握手を求める。

剣士は少し考えた後、手を差しのべた。

「よろしく！男前のにいちちゃん！」

「ああ、よろしく、我が……いや。」

男が途中で言葉を止める。

「その傷、大丈夫なのか？」

「こんくらい、寝たら治るぜ」

「それは、羨ましい、私は傷が深ければ死ぬだろう」

「あんた、アホみたいに強いから大丈夫だよ」

「アホ・・・」

少し顔がひきつる剣士。

「それでは行こうか、翔、アホ」

ニヤがなにげに暴言を吐く。

「調子に乗るなよ！ニヤ・・・・・・・・！！！！！！！！！！」

剣士が怒りの声をあげたが、翔には何故か名前の後半が聞こえないのであった。

使者

三人で旅をする様になって、一週間は経った。
剣士と人形の相性はすこぶる悪いみたいで、常に火花を散らしている。

仲裁に入る翔だが、それがアネスには気に入らないらしい。

ある日、アネスが翔を呼び出し、ニヤが見えなくなる所まで連れていくと、

「翔、私今まで隠していたけど・・・」

突然甲冑を脱ぎ始める。

黒いワンピース姿には、なんと豊かな胸が！！！！

「本当は女だったの・・・」

「な！そうなの！？」

初対面ではどうみても男だったのに、そういえば声も女っぽくなっている。

翔が動揺していると、いつの間にかニヤがやってきて

「翔に気に入られたくて女になったな、アネス」

「なんの事かしら、最初から私は女よ」

アネスがしらばっくれる。

「あなたこそ、翔を油断させる為に、少女の格好をしているのかしら」

天井から低い笑い声が響き渡った。

三人は思わず身構える。

「貴様らが復活したと聞いて様子を見にきてみれば、女子供とは、これは御笑い草だ」

天井から降りてきたのは人ガタの闇だった。

「ナイト……か」

ニヤが憎らしげに口を開く。

「気安く我が名を呼ぶな、汚らしい腫れ女が！」

ナイトが怒りを顕にする。

「貴様ら成り損ない、ノ……様の手を煩わせるまでもない、ここで全員死ね！！！」

ナイトの両手から大量の黒い煙が吐き出された。

ゾンビ

「煙に触れるな！ 軀が腐るぞ！」

アネスが黒い煙を避けながら叫ぶ。

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

忠告の甲斐なく翔が煙幕に飲み込まれる。

「翔！？ ニヤ！ 何をしている！！ 地獄の火焰を速く撃て！！！！」

充填中なのかニヤはピクリとも動かない。

「ははは、腐り果てて死ねい」

ナイトがさらに距離を詰めて煙を吐こうとした、その時、

何者かがナイトを羽交い締めになっていた。

それは、肉が焼けただれたゾンビであった。

「翔！！！！」

「ニヤあああああ、撃てええええええ」

「ぐっ！ 離せこのしにぞこない！！！！」

ニヤの両目が赤光を放ち、口から火焰が吐き出される。

「ぐぎゃあああああ！……！！！」

直撃を喰らったナイトとゾンビの悲鳴が響き渡る。

「おのれ、ニャ……この復讐は必ず……」

地面に吸い込まれる様に、ナイトが退散していく。

「ノ……に次はお前だと伝えておけ」

ニャが影に向かって、そう言うと、

深い恨みの声とともに気配が消えた。

大好き

まる一日たって、翔が完全回復した。

嬉しさで思わず翔に抱きつくアネスとクールな眼差しのにやが対称的だ。

「やはりハ・・・とノ・・・が組んだ様だな」
にやが珍しく口を開いた。

「我々が手を組んだ以上、当然の成り行きだ。」

アネスが翔に抱きつきながら答える。

（おっぱいが手に当たってるんですけど）

鼻血が出そうな翔がなんとか切り出す。

「なあ、なんでお前らそんなに事情通なんだよ」

「翔が忘れ過ぎなのだ。強力な力と引き替えに記憶が吹き飛んだみたいね」

大好きといった眼差しでアネスが翔をみる。

にやが人の創造しうる完璧な美しさなら、アネスも自然が産み出した官能的で壮絶な美しさを持っている。

とは言え、アネスは最初は男だった様だが・・・

この二人にとっては性別等いつでも変更できるのかもしれない。

「アネス、翔にベタベタひつつくな。」

ニヤの発言はひょっとして嫉妬？

「あら、ニヤには関係のない事だわ」

ニヤも負けじと余った方の翔の腕をギュッと抱く。

少しではあるがこちらにも柔らかい膨らみが・・・

翔にとっては奇跡のモテ期到来と言った所か。

そのまま三人は眠りについた。

呪怨

暗闇の中で苦鳴の声が延々と聞こえる。

「おのれえ．．．二ヤ．．．め！癒えぬ．．奴の炎の傷が癒えぬ．．．」

闇の中で別の声がした。

「ナイト．．．敗れたか」

忽ちナイトは声の方にひれ伏すと、

「これはノ．．．様、お見苦しい所を、敗れたではありません。偵察に行つて少し火傷したまでの事」

「まあよい、ク．．．の不死身には手を焼きそうだな。五体を分解して封印するか」

「そうですな、奴以外は再生能力はなさそうですし．．．二ヤ．．．めはこの手で八つ裂きにせねば気がすみません」

「油断するなよ、次はハ．．．が仕掛ける筈だ。あまり期待できませんが」

「ハ．．．様ならあるいは、奴等を皆殺しにできるやも知れませんが」

「お前も加勢できるならしてやれ」

「御意・・・」

二つの闇の気配が消えた。

蜂男

洞窟をさらに進み、直径100メートルはあろうかというドーム状の空間に出た。

「これくらい広いと解放感あっていいな！」

そう言って翔が大きく伸びをする。

「羽を伸ばしている暇はなさそうだ」

ニヤがドームの奥を見つめている。

少しずつ近づいてくる浮遊物体。

それは三メートル位の巨大な蜂の様な怪物だった。

「ハ・・・の手の者か・・・」

アネスが緊張した面持ちでブロードソードを構える。

五メートル位手前で蜂が止まった。

「ク・・・と、ダ・・・か、何故ニヤ・・・・・・・・一緒にいる？」

蜂が機械の様な声で話かけてきた。

「成り行きでな。私は本意ではないが」

アネスが答える。

「そんな事いうな、アネス」

翔がたしなめると、アネスが少し膨れっ面になる。

「俺はビヤ・・・今後ともよろしく」

「ハ・・・の犬が何の用だ？」

ニヤが冷たくいい放つと蟲はそちらに敵意の眼を向け、

「ク・・・退け、俺が始末しなければならんのは、こいつだけだ」

「無理だな。ニヤは俺の仲間だし、かわいいし」

「外見に騙されるなク・・・」

「わけのわからん名前で呼ぶな蜂野郎」

「愚かな邪神よ、地獄で悔いるがいい」

蜂の腹部の先から数千本の針がニヤに向かって放たれた。

頸

「ふっざけん……!!!!!!」

翔がニヤを庇おうとするが追いつかない！

アネスが左手を振るとニヤの目の前で水の壁ができ、針を全て落とした。

「借りだぞ、ニヤ」

アネスがいまいましげに言う。

突如地面に潜んでいた数十体の魚の頭部を持ったモンスターが出現する。

「くそ！数が多いな、どうする？」

先頭の魚人を槍で切り払いながら翔が叫ぶ。

「準備は整った。翔、アネス、地面に伏せろ」

急いで二人が這いつくばった瞬間に、ニヤの両目から蒼い光線が横一直線に放たれると全ての魚人の上半身と下半身が分断され、大爆発を起こした。

「蜂野郎もやったか!？」

翔が周囲を見渡すといつのまにか、グラ……がアネスの背後を取

っていた。

「くっそ!!!!!!!!!!」

翔が横っ飛びで間に入るとグラの腹部にある巨大な毒針で背中を貫かれた。

「ぐはぁ!!!!!!!!!!」

猛毒が体内に入り、全身が紫色になる。

「うああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

アネスが一閃でグラの首を切り飛ばす。

どっ、と蟲の巨体が地面に墜ちた、が瞬く間に起き上がり

「やってくれたな、ダ・・・」

と蟲は言いながら、自分の首を手で抱え飛び去っていった。

ペットショップ

翔が完全回復するまで三日かかった。

それほどまでにビヤ・・・の猛毒は凄まじかった。

「ごめんなさい翔！」

抱き付いて泣いて謝るアネスに

「気にすんな、相手の攻撃を受けるのは不死身の勤めだぜ」

と気さくに笑う翔。

一行が旅を続けていると、一軒のペットショップに遭遇した。

三人が店内に入ると見たことのない奇怪な動物がたくさん檻に閉じ込められていた。

ニヤがその中の一つを凝視している。

「ん？ニヤ、どうした？」

翔が近付くと何やらニヤが話かけている。

檻の中の生き物は、全身が白くほつぺたが赤い、オカメインコの様な動物だった。

「シャン・・・何をしている？」

「これはニヤ……様……!私、ナイト……めに捕まってしまう、ここに売られてしまったのです」

「なんと情けないこと」

「面目ありません」

翔が横から檻を除き込み、

「ニヤの友達か？」と聞くと

「めっそうもございません!ニヤ様は私のご主人様でございます」

と慌ててインコが答える。

ニヤが一つ目の店員に向かい、

「この鳥頂くわ」

と言って、料金を支払った。

こうしてインコのシャンが仲間になった。

私のもやれ

「まーた変なの買って・・・」

アネスがニヤの肩に留まっている鳥をみてぼやく。

それを聞いた鳥が

「失敬な!!!!!!!!!! 私は偉大なるニヤ・・・・・・・・様の第一の僕、
シャン・・なるぞ!!!!!!!!!!」

と羽をバタバタさせて怒っている。

「ペットショップで売られてた時点で説得力ないわ」

「なんだと!!!!!!!!!! ゆるさんぞ! ダ・・・・・・・・!!!!!!!!!!」

「まあまあ、喧嘩はやめろ、二人とも」

翔が仲裁に入る。

シャンがアネスの腰の辺りを超高速で飛びまわり、スカートがめくれ上がる。

「きゃああああ!!!!!!!!!!」

慌ててスカートを抑えるアネス。

（グッジョブ! ピンク!!!!!!!!!!）

心の中でガッツポーズをとる翔。

翔が見ていた事を確認して、大袈裟に恥ずかしがるアネス。

ちらっと、ニヤの方を向き、どや顔をする。

その後、ニヤから呼び出しをくらったシャンは

「私のスカートもたまにめくれ、いいな？」

「へ？」

さっぱり訳がわからない様子であった。

壮絶な潰し合い

四人の一行はまたもや広間に出た。

そこは洞窟の土とは違い石畳が敷かれていた。

広間には200体くらいの一つ目と魚頭が槍を構えて並んでいる。

天井から2体の影が部隊の最前列に降りてきた。

ナイト……とビヤ……だった。

ビヤ……は完全に首が繋がっている。

この蟲の不死身ぶりもたいしたものだ。

ナイトが口を開いた。

「貴様らはここで終わりだ。」

「終わるのはお前らだ。今度はにがさん」

アネスが強気に言い返す。

翔がニヤに小声で話し掛ける。

「焰の充填までいくらかかる？」

「ナイトとビヤを完全に焼き殺すには10分は必要だ」

「わかった、アネス、10分ふんばるぞ」

「わかったわ、愚図なニヤ、はやくしてね」

その時、シャン・鳥がニヤとアネスの腰の辺りを飛び回り、豪快にスカートをめくる。

ニヤは白、アネスはピンクだった。

こんな時に何をしているんだ、この鳥さんは・・・

翔は一瞬気が遠くなりかけたが、なんとか耐えた。

「おりゃあああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

気合いとともに敵陣に突っ込んでいく翔、それを追いかけるアネス。

めくれて服の上着にひっかかりパンツ丸出しで固まっているニヤ。

なぜか、どや顔で飛び回っているインコ。

翔とアネスは死に物狂いで群れを押し留める。

アネスは神憑りの体捌きで全ての槍をかわすが、翔は何カ所か刺されている。

「ニヤ!!!!!!!!!!!!!!まだか!!!!!!!!!!翔がもたない!!!!!!!!!!」

アネスがたまらず絶叫する。

「またせた、ふせろ」

ニヤが抑揚のない声で答える。

二人が伏せる。

両目から放たれた超熱線が敵部隊を分断し、大爆発を起こす。

「氣をつけろ！親玉二匹はまだだ！！！」

翔が叫ぶ。

ナイトとビヤがニヤに向かって突っ込んでくる。

ナイトの巨大な鍵爪を槍でなんとか翔が受け止める。

しかし、飛び込んできたアネスがビヤの毒針に背中から串刺しにされてしまった！！！！！！

「アネス!!!!!!!!!!!!!!」

発狂しそうな程の大声を出す翔。

アネスは全身に毒がまわりぐったりする。

「この間の借りは返したぞ、ダ・」

ビヤ・・・が勝ち誇った声をあげる。

その後、突然、ビヤの首が身体から離れた。

「な、に!？」

「再生不可能な所まで細切れにしてやろう」

もう一人のアネスはそういうとビヤを神速の剣捌きで細切れミンチにしまった。

毒針で貫かれたアネスは水になって崩れ落ちた。水で分身を作ったらしい。

翔はそれを見て安堵すると、ナイトの腰を抱き抱え、

「いけえ!!!!!!!!!!!!!! ニア! いつまでもパンツみせてんじゃねーよ!」

と叫ぶ。

「ばか・・・」

とニヤが呟くと両手から特大の火焰を出現させる。

「焼きつくしてやる、ナイト・・・」

「うおおおお、はなせク・・・!!!!!!!!!!!!!!」

ニヤが両手を振って火焰を放つ。

「苦しみだけは分かち合ってやんよ!!!!!!」

翔はそう言うのとナイトとともに焰に包まれていった。

ナイトを再生不可能なまでに焼きつくした焰は翔ですら、完全復活に1週間かかったのであった。

糞蜥蜴

暗黒の闇で気配だけがする。

「ナイト……とビヤ……が逝ったか」

寂寥を含んだ声だった。

「ノ……様、お気を落とされぬ様」

「きゃつら恐ろしい強さよのう、とくに二ヤ……の地獄の
火焰は儂でさえ、まともに受けて死なずに済むかどうか」

「我々はそう簡単には死にません、いえ、しねません、かな」

「確かにその通りですな、ハ……卿」

「ビヤ……の仇はとります、必ず」

「ほお、なにか策があたりで」

「策も何も私かあなたが直接出れば事足りるでしょう」

「おお、それでは倒してくださるか」

「いえ、あなたが先にいきなさい」

「な!？」

「同盟を持ち掛けてきたのはあなただ。 ज्या・・・の代償は高くつきますよ」

そう言って影は気配を消した。

暫くして、ノ・・・・は

「糞蜥蜴が！」

と吐き捨てた。

夜伽

一週間後、意識を回復した翔が目にしたものは、アネスの両手でギョと絞められているインコだった。

「お前は！お前の能力はパンツめくるだけかい！！」

「無礼な！これは偉大なる二ヤ……様から授かった大事な使命である。」

インコがアネスの手を嘴でつつきながら答える。

「ニヤ！！あんたこの鳥に何を吹き込んだ？」

アネスがニヤをキツと睨む。

「シャンはよくやっている。あまり苛めるな」

「どこがじゃ……!!!!」

翔は頭が痛くなってきたので、このまま寝たふりをする事に決めた。

四人が駐屯している場所に、近づいてくる人影があった。

ライトイエローと白が基本ベースのドレスに身を包んだ、金髪的美女だった。

「げえ！！！！！！！！ハ・・・・！！！！！！！！」

アネスが驚愕の声をあげる。

「あなた、何ですかその姿は？意趣替えですか？」

「いや・・・これには」

「事情はどうあれ、あなたには幻滅いたしました。離縁を申し渡します」

「あなたってアネスの奥さん？」

翔がたまらず割って入る。

「だった者です。今は独身です。女装する男に興味はございません」

「すまん、ハイ・・・私は見も心も翔に捧げて女として生きる事に決めたのだ。」

「初めて聞いたぞ！そんな話！！」

翔が突っ込む。

「クト・・・様、ハイとお呼びください。私も旅の一行にお加えください。愚かなもと亭主と違って私は役にたちます」

「なぜお前もくる?!」

アネスが反論する。

「あなたには関係のない事。私は眷属として、遣えるべき主人を見つけただけ、あなたもそうでしょう?」

「うう、そうであるが・・・」

「よし、みんな仲良くやっていこう！敵も多いしな」

翔がまとめたのでなんとか皆が承諾した。

「有り難う御座います、翔さま、今宵の夜伽は是非このハイに・・・」

「な!!!!!!!!!!」

顔が真っ赤になる翔。

「ふざけんな!!!!!!!!!!」

アネスとニアが揃って反論した。

ぼろくそ

ハイは超絶な美形で、パリコレにも出られそうな完璧なプロポーションを持った成人女性であった。

ニヤと共に西洋のドレスに身を包んでいる所から二人並んでいるとハイソサイエティの親子に見える。

翔がアネスに話しかける。

「なあ、アネス」

「なーに、翔」

「お前、男に戻れよ」

「なっ?!」

「お前の好意は嬉しいけど、男の友達も欲しいんだよ」

「うう、そうなのか？」

インコが会話に加わる。

「早くもどれ、おかま野郎」

「鳥い!!!!!!そこに直れ!!!!!!叩き切ってやる!!!!!!」

アネスが剣を腰に構える。

翔が少し疲れた様子で止めに入る。

「もう、喧嘩すんなって、ハイも旦那さんが男に戻った方がいいよな？」

冷やかな眼差しでアネスを一瞥したハイは、

「もと亭主、です。今は私の意中の方は翔様です。あの様な女装趣味の男には欠片の未練もございません」

ぼろくそな言われ様であった。

数日後、何事もなかったかの様にアネスは男に戻っていた。

おさらい

翔、ニヤ、アネス、シャン、ハイ、と、いつの間にか大所帯になってきたパーティだったが、いささか喧嘩が多いのが難点か。

それぞれのキャラのおさらいをすると、

翔はごく普通の中学生くらいの少年で、ただし、不死である。瀕死で倒れた時に飲み込んだ石が関係している様だが・・・身体を張った道づれ攻撃は敵側を恐怖に陥れている。

ニヤは一見、人形と思える程の完璧な容姿をもった少女の姿をし、西洋の貴族の様なドレスを着込んでいる。感情はほとんど見せないが翔の事が好きみたいだ。超高熱の火焰攻撃が得意である。

アネスは黒色の長髪で男性の時は美青年、女性の時は美女である。剣の達人でその腕前はビヤを倒した事でも証明済みである。

水の力を多少使えるみたいだ。

シャンはペットショップで売られていたオカメインコで、毒舌家である。

風の力を使える様だが、今の所、パンツめくりにしに使っていない。

最後にハイだが、こちらも西洋の貴族風のドレスを着た超絶美形の成人女性で、実力は未知数だが、本人曰く、アネスより上らしい。

最近ではこの五人に恐れを成して敵も近付かなくなっていた。

そうして一週間くらいたった。

仮面インコ

一行は洞窟の少し広まった場所で休む事になった。

ハイが水で作ったテントを人数分用意してくれる。ご親切に外からは曇りガラスの様に見えなくなっていてプライバシーはばっちり守られている。

「さすが姉さん！どっかのおかまとは違うぜ」

シャンがそう言いながら、アネスの方を見る。

「ぐっ！！！！！！！！」

こめかみに青筋を立ててアネスは耐えている。

「こらこら、喧嘩すんな。今日の立ち番はシャンな、おやすみ！」

そう言って翔はテントに入っていく。

全員がテントに入って休むと、退屈そうにインコがうろうろ歩いている。

「誇り高き私がなぜ立ち番なんぞを・・・」

ぶつぶつ文句を言っている。

不意に眼前に巨大な物体が出現した。

それは立派な髭を蓄えた男の巨人であった。イルカに狂暴な牙がたくさん生えた変な生き物に跨がり、少し宙に浮いている。

男が口を開いた。

「二ヤ・・・・・・・・の僕か・・・・・・・・」

「何者だ、おっさん」

「我が名はノー・・・・、貴様らを葬る者だ」

「知らねえなー、おーいみんな!!!!!! 変なのがきたぞ!!!!!!」

テントの住人達は熟睡しているのか、何の返事もない。

インコは不機嫌に舌打ちする。

「ちっ!!! 屑どもが・・・・」

「まずは、お前からだ、鳥・・・・」

巨人は手に持った三ツ又の槍で突いてきた。

インコは素早く横に飛んでかわすと

「ちっ、面倒くせえなあ」

まるまるのお腹にベルトを巻き、手にはドーナツツの様な物体を持つて構え、ベルトにかざす。

「変身!!!!!!!!!!」

「セキセイ! オカメ! ヨウム!」

「セキカウム!!!!!!!!!!」

ドーナッツから変身ソングが流れる。

なんかいろんなインコが混じった鳥ができあがった。

「歌は気にするな」

シャンはそう呟くと

「仮面インコダブルキック!!!!!!」

ノー……に向けて豪快に鳥足でキックを放つ!

「ぐはあっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

まともに蹴りを喰らった巨人は血へどを吐きながら、イルカと一緒に消えていった。

インコは変身を解くと、その場でふて寝する事にした。

邪魔くさいのでこの日の事は誰にも話さなかった。

うるせーよ

漆黒の空間で咳き込む声だけが響く。

「ぐはっ、げほっ、ごほっ・・・」

インコに蹴りをかまされたノー・・・であった。

「くそっ！何だあの鳥のベラボーな強さは！！」

ゴバツ！と激しく吐血する。

「シャン・・・鳥ごときでこの強さとは、信じられぬ」

闇からもう一つの気配が現れる。

「こっぴどくやられましたな、ノー・・・様」

ノー・・・は怒りを感じながら無視する。

「ノー・・・様？」

「うるせーよ！！！！カスが！！！！お前が動かねえからこんな目にあってるんだろが！！」

「そんなに怒られると身体に毒ですよ」

「黙れ！次はお前がいけ！！ハス・・・！！！！！！！！！！」

影は溜め息をつきながら

「やれやれ、仮にも神と呼ばれた者が鳥ごときに遅れを取るとは」

「うるせーよ、次はお前がいけっていつてんだよ!!!!!!!!!!」

「私にその様な口をきかれるとは、同盟も解消ですかな」

「せいせいするわ!!!!!!!!!!消えろ!!!!!!!!!!」

「愚かな・・・」

そのまま一人の気配が消えた。

野良犬

旅を続ける一行であったが、行き先に直径4メートル位の奇妙な球体が浮かんでいるのを発見した。

「なんだこりゃ」

翔が近づいてみる。すると球体に穴が出現し、中から巨大な犬が頭を出して口を開け、翔の頭を呑み込んだ。

首から下がぶらんと空中で揺れる。

「いかん！！！！！！ティ・ダ・・だ！！！！！！」

シャン鳥が絶叫する。

「絶対にニヤ様に近づけるな！ニヤ様は奴に噛まれたら死ぬ！！！！！！」

バキッ！ゴキッ！

翔の首が食い千切られ、胴体が地面に落ちる。

「翔！！！！おのれ、この野良犬があ！！！！」

アネスが剣を鞘から抜き斬りかかる。

巨大な犬は球体から素早く抜け出ると翔の首を飲み込んでしまう。

「翔さまっ！なんてこと！」

ハイが片手を振り、超高压の水流カッターを巨犬に向けて放つ。

巨犬は難なくかわすと、照準をニヤに向けて全力で駆けてくる。

「いかん！ニヤ様逃げて！！」

シャンが絶叫する。

「シャン、私先に逝くかも」

ニヤが弱々しく答える。

シャンがベルトを巻き変身する。

「ワカケ！ウロコ！コンゴウ！！！！うおおおおおおおおお
お！！！！！！」

シャンが変な鳥のキメラになる。

「かたずけてやるっ！このくそ犬が！」

シャンはティ……に襲いかかった。

半分消化

「ダブルインコキック!!!!!!」

強烈な蹴りがティン・・・の顔面に直撃する。一瞬ひるんだ巨犬は、しかしすぐに態勢を建て直し、ニヤに向かってくる。

「おおおおおらっ!!!!!!!!!!!!!!」

アネスが剣で斬りかかるが、牙で受け止められる。

すかさずハイが水の Cutter を放つ、しかし鋼の様な体毛には傷一つつけられない。

ティン・・・は巨大な口を開け、ニアに襲い掛かる。

「中から爆発しろ、馬鹿犬」

ニヤがそう言い放ち、手のひら位の火球をティン・・・の口に放り込む。

ティン・・・の爪がニヤの腕に当たり、ドレスを切り裂いた。腕が出血している。

ニヤの両眼が金色に輝くと、ティン・・・の口内にあった火球が膨張し、激しい爆発と共に巨犬を中から切り裂いた。

「ニヤ様！無事ですか?!」

シャンが駆け付ける。

「私は平気。それより翔の首を」

シャンは四散した臓器から胃を見つけ、翔の首を取り出す。首は半分消化されていた。

首を繋げられた翔は回復に一週間、ニヤは天敵から受けた傷のせいか二週間生死の境をさ迷う高熱にみまわれた。

ハイがニヤの腕に水の膜を作り治療している。ハイは治癒能力も使える様だ。

「あなたの焰は凄いわね、ニヤ」

「ハイの治癒能力も貴重だわ」

「一人役に立たない奴がいるがな」

シャンがアネスをみて毒舌を吐く

「お前に言われたくねーよ、アホウ鳥が」

「やんのかカマ野郎!!!!!!」

みんなは知らない、アホウ鳥がノノノノという神クラスの強敵を一蹴したことを・・・

今宵は私と踊りましょう

翔は思い悩んでいた。

自分はここに来て何日経ったのだろう。

少なくとも三ヶ月はいるはずだ。

親は心配しているだろう。

仲間ができた、基本みんないい奴だ。

好きな娘も出来た。

ニヤだ。無愛想で無表情だが、もろ好みの女の子だ。本当かどうかわからないが、自分の事を好きだと言ってくれている。

ハイやアネスは自分の事をク・・・と呼ぶ。その昔、自分は二人の主人だったらしい。まったく記憶にないが・・・

やはり、あの時飲み込んだ石が自分を変えてしまったのか。死んでも死なない不死の身体に。

そして執拗に我々の命を狙ってくる敵、今の所名前がわかっているのは、ノー・・・とハス・・・の二人だ。どちらも邪神、つまり神だ。向こうにとってはこちらが邪神なのだろうが・・・

考え事をしていると、ニヤが来た。

華奢で美しい手を差し伸べると、

「翔、今宵は私と踊りましょ」

どこからかシャンがバイオリンを取りだし、演奏を始める。

時間を忘れて二人は踊った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5435x/>

洞窟探検家

2011年11月24日21時54分発行